

都市史研究

THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN

VOL.

53

2006
0915

朝夕日毎に涼しくなってきましたが、皆様におかれましてはますますお元気でお過ごしのことと存じます。さて、長らくのご無沙汰となってまいりましたが、レイアウトも一新いたしました都市史研究会のニューズレター53号をお届けいたします。

都市史研究会では、今年度から発足した吉田伸之氏、伊藤毅氏を代表者とする二つの科研プロジェクト（略称「とらっど3」）による共同研究と連携し研究を進めていくことを計画しています。「とらっど3」では、これまでの伝統都市論の総括と新たな展開をめざして、『シリーズ伝統都市』4巻の出版を計画しており、都市史研究会では、6月以来、その準備報告会を兼ねて月1回のペースで都市史研究会例会を開催してきました。本号では、「とらっど3」との共催による今年度例会の概要と、昨年度に開催されましたシンポジウムの報告及び参加記を掲載いたします。なお9月以降もひきつづき「とらっど3」との共催で例会を開催していく予定です。みなさまの例会へのご参加をお待ちしております。

とらっど3 発足にあたって

今年度、都市史研究会の“界限”で、二つの大型科研プロジェクトが新たに始動しました。一つは、基盤研究S「16-19世紀、伝統都市の分節的な社会＝空間構造に関する比較類型論的研究」（代表：吉田伸之、2006～2010年度）で、もう一つは基盤研究S「都市アイデアの生成と変容に関する空間論的研究」（代表：伊藤毅、2006～2008年度）です。伊藤氏と吉田は、この二つのプロジェクトを相互に密接不可分なものとして捉え、これまでの“ぐるーぷ・とらっど”と同様に共同で運営することにしました。“とらっど3”の誕生です。

とらっど3は、公正で民主的な運営に努めることを基礎として、ディシプリンを一層重視しつつ、21世紀前半の都市史研究の方向性を戦略的に見据えた研究計画を実践してゆくつもりです。そして次世代を担う若手研究者を支援し、海外の都市史研究者と意味のある研究交流を展開したいと思っています。

すでに今年6月には、『シリーズ・伝統都市』という新たな出版企画をスタートさせ、そこでの執筆予定者の方を中心に毎月のように公開研究会（都市史研究会）を開催しております。また、基盤研究重視を具体化するために、「描かれた都市」研究会、「都市と宗教」研究会、「江戸町触を読む会」等の研究会が活動をはじめました。

とらっど3の今年度の重点研究課題は「分節構造と社会的結合」です。これは伝統都市の社会＝空間構造の特質を、比較史的に検討しようというものです。これにむけての企画として、①アラン・チレー氏招聘プロジェクト、②都市史研究会シンポジウム、の二つに今秋つづけてとりくみます（7頁参照）。多くの御参加をお待ちしております。

吉田伸之

とらっと3 発足にあたって

このたび吉田伸之氏の科研とともに、私が研究代表者として申請した「都市アイデアの生成と変容に関する空間論的研究」（基盤研究A）が採択され、新たな研究組織「とらっと3」が発足したことは、たいへん喜ばしいことではありますが、むしろわれわれに託された期待の大きさを考えると、身の引き締まる思いを禁じ得ません。吉田科研と緊密な連携をとりつつ、メンバーのみなさまの積極的なご参加を得て、充実した成果を出したいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

私の申請した科研のテーマは現在企画中の『シリーズ伝統都市』の第1巻「都市アイデア」に直接関連したものです。科研申請書には次のように記しました。「都市の建設や改造は、意識的か否かにかかわらず、特定のアイデア（公権力の視覚化、宗教的理念、市民的な共同空間理念など）にもとづいて具現される。また構築された都市で時間をかけて形成された空間や社会には複数の都市アイデアが積層・共存する。すなわち都市をアイデアから読み解くことは、都市に関わる諸権力、時代精神、社会・文化的諸位相を総合的に捉えうる新たな方法を開発することにつながる」。「都市アイデア」という語はまだ十分に熟した言葉ではありませんが、この共同研究を通して、少しずつ堅固なものに鍛え上げていきたいと考えています。

今年度はその第1弾としてフランスを取り上げ、都市アイデア論研究をスタートします。具体的には私と加藤玄氏を中心に南西フランスの中世都市バステードの調査研究を実施します（9/11～9/25）。またメンバーの松本裕氏も渡仏し、近代以降のパリの都市アイデア論的研究を進める予定です。ご興味のある方はぜひご参加ください。今年吉田科研もフランスを対象とした研究が進められることになっており、この点でも有機的な連携がとれるものと期待しています。

伊藤 毅

ラウンドテーブル「16～19世紀の都市アイデアとソシアビリテ」・報告

5月13日、東京大学法文2号館第3会議室において、「16～19世紀の都市アイデアとソシアビリテ」と題したとらっと3の第1回ラウンドテーブルが行われました。当日の報告者とタイトルは以下のとおりです。

吉田伸之・伊藤 毅 問題提起

杉森哲也 「描かれた都市——16～17世紀の都市図屏風を中心に——」

高澤紀恵 「近世パリのソシアビリテ：近隣関係の変容とエリート」

高村雅彦 「台湾の公設市場に見る日本近代の都市建築アイデア」

森下 徹 「萩城下の変容と「日用」層」

第55回都市史研究会例会（第1回とらっと3研究会）・報告要旨

6月24日、東京大学工学部1号館建築学科会議室において、第55回都市史研究会例会（第1回とらっと3研究会）が行われました。当日の報告者とタイトルは以下のとおりです。ここでは松山氏による報告要旨を掲載いたします。

小林信也「江戸の河岸」

松山 恵「明治東京の都市アイデア」

当日は『明治東京の都市アイデア』というタイトルで、大きく二つの内容を報告した。まず「維新时期東京の空間構成原理」

では、江戸に維新政府の首都がおかれる過程でもたらされた都市構造の変化を、諸官庁の整備や公家らの屋敷受領の様相などに注目しながら明らかにした。つづく「銀座煉瓦街の「計画」性」では、これまでおもに対外的な関係から理解されてきた明治期の都市計画事業について、さきの首都化の文脈、および公共性の問題（19世紀における推移）からあらたに捕捉することを試みた。

第56回都市史研究会（第2回とらっど3研究会）・報告要旨

7月21日、東京大学工学部1号館建築学科会議室において、第56回都市史研究会（第2回とらっど3研究会）が行われました。当日の報告者とタイトル及び報告要旨は以下のとおりです。

金行信輔 「都市空間と宗教」

江戸をはじめとする近世城下町の基本的な計画理念として、武家地・寺社地・町人地という身分別の居住域の区分（ゾーニング）が想定される。しかし実態としては、門前町屋、武家地内の寺社、町人地内の宗教者など計画理念から外れる両義的な要素も少なくない。また、寺院の配置や移転も権力によって強制的に行われる例ばかりではない。寺社の自律性に注目しながら、城下町の計画理念について再考する。

三枝暁子「西京と御土居」

鎌倉期に平安京の右京西北部に成立した北野社領「西京（にしのきょう）」には「西京神人（じにん）」が住み、山門を本所とする齋座を形成していた。彼らは足利義満政権期に、「座」ではなく「保」という領域単位により再編成されるが、やがては豊臣秀吉の御土居堀築造により「保」も解体されていく。本報告では、御土居堀が「御土居の袖」とよばれる奇妙な形態を伴いながら、「西京」を分断した点に注目し、その背景・理由、及び影響について検討した。

禹 成勳「建国初・遷都にみる開京と寺院の役割」

首都のアイデアは、新たな国家の建国と遷都時期、比較的明らかに現われると思われ、高麗が建国され、遷都が行われた時期の首都開京を素材として、都市アイデアというテーマに関して考えてみた。具体的な内容は、開京の地理的条件、場所的特性と遷都以前開京に置かれていた都市的・首都的基盤、遷都後数多く建てられた寺院が、開京への遷都、王室と支配の正統性の確保、開京という場所の首都空間化に及んだ影響と役割を中心に報告した。

第57回都市史研究会例会（第3回とらっど3研究会）・報告要旨

8月18、19日の両日にわたり東京大学工学部1号館建築学科会議室において、第57回都市史研究会例会（第3回とらっど3研究会）が行われました。当日の報告者とタイトル及び報告要旨は以下のとおりです。

吉澤誠一郎 「近代中国の租界」

中国の租界とは、条約による開港都市に付随して設定された外国人居住区域である。1842年の南京条約にやや抽象的に規定された英国人の居住許可にもとづくとはいえ、具体的には、開港場ごとに清朝の地方官と領事とが取り決めを行な

うことで設定された。取り決めで指定された範囲の土地が外国人に貸し出されるという形をとり、その内部での行政権が実質的に外国側に掌握されたのである。ここには、中国側権力と列強との相互交渉（妥協）の結果として一定の支配秩序が形成される様相を見て取ることができるだろう。

武部愛子「近世寺社領の権力構造——越後国古志軍蔵王権現別当安禪寺を素材として」

今回の報告では、蔵王権現別当安禪寺と隣接する長岡城下町との関係を、主に利害対立の局面から描くことで、両者の権力構造の特質を浮き彫りにすることを試みた。具体的には、天保期におきた川前殺生禁制一件（長岡藩家中が安禪寺領（朱印地）である蔵王町社前で、不法に魚鳥の狩猟を行ったことに関する一件）を素材として検討した。今後は、さらに事例を増やし安禪寺の権力内部構造をより細かくみていきたい。

塚田 孝「「都市法」への視角」（要旨なし）

栗田和典「「長い18世紀」ロンドンのニューゲイト監獄」

都市ロンドンの司法機構をささえて刑事犯と債務者を収容したニューゲイトをとりあげ、20箇所以上に存在したといわれる監獄の、個々に多様ではあるが、一つの具体的な姿を呈示した。建造物としてのニューゲイトの変遷、18世紀の内部構造および管理運営体制、被収容者のプロフィールなどをあきらかにするとともに、変化の相として18世紀末から19世紀はじめに生じた処刑場機能の付加とミドルクラスの女による慈善活動に言及した。

吉田ゆり子「湊町と周縁社会——相模国三浦郡浦賀を素材として——」（要旨なし）

佐賀 朝「明治期大阪の都市下層社会——長町とその周辺地域の近代化——」

報告者がこれまで明らかにしてきた大阪長町の明治前半期の流れについて再整理した上で、20年代の南大阪における貧民労働力とも関わる工業化の動きの実例を紹介した。具体的には長町東側の所有地を開発し長町貧民を雇用したマッチ工場・製燧社の又木治太郎と、難波村の戸長でもあり、成舞煉瓦製造所を経営した成舞長左衛門である。雇用労働力などに相違もあるが、両者とも、この時期進んだ大阪南部周縁地域の工業化の態様を示す典型例であった。

岩間俊彦「ミドルマン——イギリス地方都市における商業社会」

本報告は、18、19世紀のイギリス地方都市におけるミドルマン（都市の中間流通に従事する者）の動向について検討した。まず、日本におけるイギリス都市史と都市計画史の研究の関連等を概観した後、ミドルマンをめぐる論点を整理し、都市の商業社会という視点からミドルマンを捉える必要性を示した。さらに、北部イングランド、西ヨークシャーの諸都市（特に、ハリファクス）に焦点をあてながら、第一に、同時代に用いられていた商工人名録の特徴を、第二に、ハリファクスの二つの市場の事例、ピース・ホールと呼ばれる毛織物の取引会館と、食肉等を扱うニューマーケットの動向を分析して、都市の商業社会における流通の実態について明らかにした。

シンポジウム「伝統都市の類型Ⅰ 日本とフランス」・報告記録

2月19日、東京大学工学部1号館建築学科会議室においてミニシンポジウム「伝統都市の類型Ⅰ 日本とフランス」と題した研究会が行われました。当日の報告者とタイトルは以下のとおりです。ここでは竹ノ内氏による報告記録を掲載

いたします。

加藤 玄「『都市』と『農村』のはざままで——中世南フランスの新設集落研究と中世集落形態分析——」

中島智章「近世・近代のパリ都市計画——アンリ4世からオースマンまで——」

竹ノ内雅人「江戸宗教者の集団と社会」

今回の例会における報告では、江戸の宗教者と、彼らを取り巻く社会的な環境とがいかなる関係を持ち、それをどのようにとらえるかを、これまでの都市史研究や身分的周縁研究をふまえて行うつもりだった。しかし、調べていくうちに結局はその入り口にたどり着くまでの基本的な事象を提示しただけにとどまった。この点が今回の報告で反省点として深く悔悟するところであった。

都市の勧進者、とりわけ願人坊主などの芸能をもとに生計を成り立たせる零細な都市民衆と、祈祷・占いなど呪術的技量をもって集団化する下層宗教者、このふたつの集団はともに京都の本所を頂点として、組織化されていたことなどはこれまでの研究によってすでに明らかになっている。ただ、修験・神職・陰陽師といった呪術、宗教的知識をもとに階層化されている集団は、彼らを取り巻く社会との関係性についてまだ十分な検討がなされていないと考え、これらの宗教者を単なる同レベルの集団ととらえずに、その活動の実態に準じた把握を行いつつ、宗教者集団内での階層性の存在、巨大都市内での地域による偏差、それぞれの宗教者の存在形態を考える端緒といった点については、この報告で多少明らかにしたつもりである。

天保年間には150人近くの修験、100人前後の神職が存在していた。このような宗教者たちの中で、塚田孝氏が大坂で指摘されたような相互の流動性があったのかどうか、また陰陽師との関係は、といった各宗教者集団の特色と相互関係については、結局言及できなかった。この点こそまさに都市における宗教者の存在を考える上で重要な点でありながら、踏み込むこともできなかったところが今回の報告における大きな欠落点であったと思う。また、宗教者の活動実態についても、おもに武家や上層町人との関係を構築しているような宗教者の事例を指摘するにとどまり、かれらが居住している町の性質、また主要な位置を占めるであろう都市民衆との関係性について、あまり検討することができなかった。これらが先に指摘した論点に対して、何も言い切れずに終わった原因であると、未だに深く反省している。今後これらの反省点をふまえて、江戸の宗教者の全体像を具体的に提示していくための基礎としていきたい。

竹ノ内雅人

シンポジウム「江戸とロンドン」・参加報告

地理的にはユーラシアの東西と非常に離れていながらも、江戸とロンドンという二つの都市は十八世紀までには政治・経済・文化の中心地として成熟し、不思議なパラレリズムを見せた。そのパラレリズムと相違点について東西の第一線の研究者が集まり議論する、いわば贅沢な知的饗宴がこの〈江戸とロンドン〉コロキウムであった。三月の曇天の中、会場となった東京大学工学部1号館の大教室には日本史・西洋史・建築史・美術史など様々な分野から多くの聴衆が詰め掛け、関心の高さを窺わせた。

近藤和彦氏（東京大学）の問題提起の後、ポール・スラック教授（オクスフォード大学）、伊藤毅氏（東京大学）、浅野秀剛氏（千葉市美術館）の報告があり、その後討論に入った。報告・討論はすべて英語で行われた。司会進行は坂下史氏（東京女子大学）。近藤氏の問題提起は江戸とロンドンの成熟というパラレリズム、および人口規模・国制などの相違点を開示した。スラック教授の報告「首都の勃興とロンドン像」は、17世紀から18世紀初頭にかけて急激に変化したロンドンの実態と表象を、人口・経済・社会生活・言説など多様な側面から論じた。伊藤氏の報告「江戸——都市と建築」は、江戸の街区開発の特徴、明暦の大火前後での変容、都市文化のあり方などを、パワーポイントを活用したプレゼンテ

ーションで示した。浅野氏の報告「江戸の描かれ方——屏風・点巻を中心に」では、江戸各所図屏風などの図像に描かれた江戸の姿がスライドで紹介された。報告後の討論では、論点を広げるフロアからの発言もさることながら、報告者同士がお互いの報告に大変刺激された模様で、相互に質問し合っていた姿が印象的であった。大都市の比較研究は困難を伴うが、こうした研究者どうしの交流の積み重ねが大きな成果に結実するだろう、と予感させるコロキウムであった。

久保山尚

シンポジウム「近世大坂の法と社会」・参加報告

本シンポの目的は、一日目の冒頭に塚田孝氏から「問題提起：法と社会という視角」と題して報告された。それよれば、氏の提起する「法と社会という視角」とは、次の二点をポイントとしている。すなわち、一つは「法の形式」であり、もう一つは「法の内容」である。前者は、法それ自体を検討することであり、後者の内容理解にも関わる作業でもある。後者は、「法を手がかりに社会に迫る」ことである。これらの手続きを踏まえ、近世社会を解明することを究極的には目指すのである。

つまり、氏は「法」を社会の実態解明の一つの素材として扱う際の方法論を提示したといえる。本シンポは、氏の提示する方法を用いて、近世社会のあり様をさらに解明することを目指したものであるといえよう。特に今回は、「法」の中でも町触を素材とし、都市社会の解明を企図している。

そのため一日目は主に比較検討を目指し、まず大坂について塚田孝氏から、江戸について松本良太氏から、京都について杉森哲也氏から報告がなされた。それぞれ、大坂は惣年寄、江戸は町名主、京都は町代という、町奉行からの町触を市中に伝達する主体を軸とし、江戸の場合を除いては、彼らを通して町に残された触留を用いた報告内容となっていた。ここで取り上げられた存在は、いずれも町政機構の頂点に位置する者たちであり、町政機構の枠組みが法の伝達にも機能しているということである。すなわち、塚田氏が報告で主張されているように「社会の基礎に地縁的な共同組織が強固に存在している日本社会のあり方と関連」していることが明らかである。

こうした近世日本の法の伝達のあり方に対し、続いて諸外国の例として、清について井上徹氏から、ビザンツ帝国について井上浩一氏からそれぞれコメントがなされた。清の場合、法は貼り紙という形式で民衆に伝達されたが、必ずしも民衆に周知できていたかどうかは不明のようである。また、日本のように発布された法が民衆の側で記録として残されることはないという。ビザンツ帝国の場合にも、広場で官僚が読み上げる形で、法が伝達されたという。両国の法の伝達のあり方からは、先述した三都での法の伝達に関わる「地縁的な共同組織」の存在は窺えない。つまり根本的に社会の基礎を構成するものが異なっている、ということが確認できたといえよう。

二日目は対象地域をほぼ大阪に限定して、まず大坂町触の主として形式の再検討について野高宏之氏から、つづいて町触の発給所たる町奉行所の改革について安竹貴彦氏から、大坂における医療について海原亮氏から、最後に大坂町触が尼崎藩に伝達されていたことについて岩城卓二氏からそれぞれ報告がなされた。個別報告の後、最後に吉田伸之氏からのコメントがあり、都市民衆世界の研究の視座から、塚田氏の「法と社会」という視角に対して言及がなされた。吉田氏は「法と社会＝実態の距離」を計測することが重要であると指摘し、その際のポイントとして①伝達の制度的解明②民衆世界の町触受容条件、の二点を挙げた。つまり、「法と社会」という方法論に、法において、社会把握・認識がどの程度なされているかを意識しておく必要があることを付け加えたのである。コメントの後、全体討論が行われ、本シンポジウムは終了した。

期間も二日間であり、また報告内容も多岐にわたる充実したシンポジウムであったといえる。特に、諸外国との比較は有意義であったと思われる。清やビザンツ帝国についてのコメントでは、その伝達の仕方から法が周知徹底されていたかは疑わしいとの見解が述べられていたが、これはそもそも「法」の概念が日本のそれとは異なっていたことを示し

ているのではないだろうか。「法と社会」という視角からこれらの地域を対象とする場合には、まず当該地域の「法」の持つ意味を根本的に検討した上で、「法の形式」や「法の内容」の検討を行うことが必要だと感じた。

他方、町触の形式や伝達ルートといった「法の形式」の解明に終始している報告が少なくなかった点が若干残念に思われる。本シンポの報告では、結局、「法の形式」の分析を通じて、当該地域の社会がどのようなものであると解明し、評価するかについて、言及されないままとなっているのではないか。私が理解したところでは、塚田氏の言う「法と社会」の視角の究極的な目的は、「法の形式」や「法の内容」の検討という作業を通じて、当時の社会の実態を解明することである。こうした「法と社会」という視角を、改めて自覚することが必要ではないだろうか。（於大阪市立大学、2006年4月29、30日）

松田暁子

次回以降の研究会のお知らせ

- ・第58回例会（第4回とらっど3研究会）

【日時】 2006年9月29日（金） 14：00～17：00

【会場】 東京大学出版会 第一会議室

【報告者等】

14:00～ 江下以知子氏による書評

小野将氏執筆「『国学』の都市性——宣長学のいくつかのモチーフから」『都市・建築・歴史6』（東京大学出版会、2006年）

15：30～ 加藤 玄氏 「聖なる都市」のトポグラフィ——ヨーロッパ中世における都市アイデア（仮題）」



なお引き続き、10月21日（土）14:00～17:00、11月23日（木）14:00～17:00という日程で、例会を予定しています(報告者未定)。

- ・Alain THILLAY氏招聘プロジェクト（都市史研究会・とらっど3・フランス極東学院共催）

ラウンドテーブル「社会的結合——パリと江戸——」

【日時】 2006年10月28日（土） 9：30～18：30

【会場】 東京大学文学部115番教室

【内容】

9：30～ 問題の所在 吉田伸之

10：00～ Alain THILLAY 「サン・タントワヌ城街区：パリ職業世界の実験場（1657～1791）」

13：30～ 中野隆生 「シュレーヌ田園都市の住民構成、1926～1946年——パリ郊外の社会住宅をめぐる——」

横山百合子「19世紀江戸・東京における髪結と女髪結」(仮)

16:00～ コメント1(高澤紀恵)、コメント2(森下徹)

～18:30 討論

ワークショップ「パリのソシアビリティ」

【日時】 2006年10月30日(月) 14:00～17:00

【会場】 山上会館地下会議室001

【内容】

10:00～12:00 「近世パリ都市社会史における一次史料の利用について——公証人文書・治安関係史料・破産宣告書——」

14:00～17:00 「パリ社会史へのアプローチ——方法と構築」

・都市史研究会シンポジウム「分節構造と社会的結合」

【日時】 2006年11月11日(土)、12日(日)

【会場】 東京大学工学部1号館15号教室

【報告者】(報告タイトル未定)

岩淵令治(国立歴史民俗博物館)、佐賀 朝(桃山学院大学経済学部)、岸 泰子(京都大学大学院工学研究科建築学専攻)、井上 徹(大阪市立大学都市文化研究センター)、近藤和彦(東京大学大学院人文社会系研究科)、大田省一(東京大学生産技術研究所)

News Letter 都市史研究 Vol. 53 [リニューアル創刊号]

2006年9月15日発行

事務局：〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科日本史学研究室内
編集担当：横山百合子(東京都公文書館)、初田香成(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻)
レイアウト原案：岩本 馨(京都工芸繊維大学工芸科学研究科)